第75回二松学舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時　平成九年七月五日（土）
場所　千代田校舎五〇五・二〇七教室

講演

清朝の開国説話

日本大学名誉教授
財団法人東洋文庫研究員　松村　潤　先生

研究発表

《国文学》

式子内親王歌にみる「夢」について

博士前期課程　二年　難波宏彰

式子内親王は「忍ぶる恋」の歌人として俊成卿女、宮内卿と並んで新古今時代の最もすぐれた女流歌人であったことは周知のとおりである。その式子内親王を代表する歌が、

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることのよわりもぞする

であり、この歌からは、激しい恋を胸に秘めながらも決して外にもらすことがないという式子内親王の心情がうかがえる。そういった激しい恋の中で生きてきた印象を強く与えている式子内親王であるから、当然、恋を素材にして多くの歌が詠まれている。そうしたものの中でも、式子内親王の特徴として、万葉以来恋歌の中で頻繁に使われることとなる「夢」の歌語を使った秀歌が存在しているように思われる。しかし、式子内親王の詠んだ「夢」の歌は十七首と以外に少ない。そうした数少ない中で、式子は、春、夏、秋、冬の四季の歌で、また雑歌、釈教歌の中でと、恋歌ばかりでなくさまざまな場面で「夢」を歌材に歌を詠み拡散させている。

この式子内親王が生きた時代は、貴族社会が崩壊し、平家の台頭そして源平の戦と激動の時代であった。また賀茂斎院という特殊な身分であった式子内親王は、どんな「夢」を紡ぎだそうとしていたのか、本発表は「夢」の歌語をキーワードの「恋」にとらわれず彼女の詠んだ歌の本質を究明するものである。

夏目漱石の夫婦観、社会観、自己認識の到達点

――『道草』論――

博士後期課程　二年　李　平

『道草』は大正四年、夏目漱石の四十九才の時に書いた自伝的な小